

令和6年10月17日

東京都千代田区四番町5番地3

科学技術振興機構（JST）

Tel : 03-5214-8404（広報課）

URL <https://www.jst.go.jp>

令和6年度「STI for SDGs」アワード 受賞取り組みの決定について

JST（理事長 橋本 和仁）は、令和6年度の「STI for SDGs」アワードの受賞取り組みを決定しました（別紙1）。

本アワードは、科学技術・イノベーション（Science, Technology and Innovation: STI）を用いて社会課題を解決する日本発の優れた取り組みを表彰することで、当該取り組みのさらなる発展や同様の社会課題を抱える国内外の地域への水平展開を促し、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）の達成に貢献することを目的として、令和元年度に創設したものです（別紙2）。

第6回となる今年度は、令和6年4月23日（火）から7月8日（月）まで公募を実施し、外部有識者などから構成される選考委員会による書類および面接審査を経て、文部科学大臣賞1件、科学技術振興機構理事長賞1件、優秀賞3件の受賞取り組みを決定しました。

表彰式は令和6年10月26日（土）にお台場で行われるサイエンスアゴラ2024で開催します。また、同日午後、同じくサイエンスアゴラ2024にて受賞団体の代表者による取り組み紹介（ピッチトーク）およびトークセッションを行います。

■ 受賞取り組み

● 文部科学大臣賞（1件）

団体名：公益財団法人榊原記念財団附属榊原記念病院

● 科学技術振興機構理事長賞（1件）

団体名：一般社団法人ICTリハビリテーション研究会、ファブラボ品川

● 優秀賞（3件）

① 団体名：buoy合同会社

② 団体名：群馬大学 次世代モビリティ社会実装研究センター、桐生市、群馬県立桐生高等学校、株式会社桐生再生、株式会社シンクトウギャザー、日本モビリティ株式会社、ゆっくりズム研究所

③ 団体名：IT FORCE株式会社

■ 「STI for SDGs」アワード表彰式

日時：令和6年10月26日（土）10時30分～11時30分

会場：テレコムセンタービル1階 オープンスペースA

（東京都江東区青海2-5-10）

<https://scienceagora.jst.go.jp/2024/session/26-1a10.html>

■ ピッチトーク・トークセッション

「STI for SDGs～科学のチカラで未来をつくろう！～」

日時：令和6年10月26日（土）13時00分～14時30分

会場：テレコムセンタービル3階 オープンスペースB

（東京都江東区青海2-5-10）

<https://scienceagora.jst.go.jp/2024/session/26-3b13.html>

<添付資料>

別紙1：令和6年度「STI for SDGs」アワードの受賞取り組み

別紙2：「STI for SDGs」アワードの概要について

<お問い合わせ先>

科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

〒102-8666 東京都千代田区四番町5番地3

日高 真子（ヒダカ マサコ）

Tel：03-5214-7493

E-mail：sdgs-award[at]jst.go.jp

<科学を支え、未来へつなぐ>

例えば、世界的な気候変動、エネルギーや資源、感染症や食料の問題。私たちの行く手にはあまたの困難が立ちはだかり、乗り越えるための解が求められています。JSTは、これらの困難に「科学技術」で挑みます。新たな価値を生み出すための基礎研究やスタートアップの支援、研究戦略の立案、研究の基盤となる人材の育成や情報の発信、国際卓越研究大学を支援する大学ファンドの運用など。JSTは荒波を渡る船の羅針盤となって進むべき道を示し、多角的に科学技術を支えながら、安全で豊かな暮らしを未来へとつなぎます。

JSTは、科学技術・イノベーション政策推進の中核的な役割を担う国立研究開発法人です。

令和6年度「STI for SDGs」アワードの受賞取り組み

○文部科学大臣賞

団体名：公益財団法人榊原記念財団附属榊原記念病院

取り組み名：遠隔心臓リハビリテーション

<解決したい社会課題>

- 日本では9割以上の患者が参加できていない「心リハ^{注)}」に誰もが参加できるようにし、人々の健康を守りたい
- 医療従事者の働き方改革で、長時間労働解消や在宅勤務の選択肢を増やし、より充実した医療につなげたい

注) 心リハ：心臓の治療後に適切な食事と運動、心理療法を行う「心臓リハビリテーション」。病気の再発を予防し、健康寿命を改善させる効果がある。

<取り組み概要>

心臓の治療後に再発防止や健康寿命改善のため重要とされる「心リハ」だが、日本では9割以上の患者が参加できていない。この取り組みでは、心リハへの参加者を増やすため、遠隔でのリハビリテーションを実現するアプリケーション“TeleRehab（テレリハブ）”を開発した（特許取得済）。このアプリを用いることで、年齢、性別、仕事や経済状況にかかわらず遠隔で心リハを受けることができる。

TeleRehabを用いた遠隔心リハは、医師のみでなく患者に直接対応する看護師、理学療法士、管理栄養士、公認心理師、ソーシャルワーカー、アプリの技術部門など、多職種のメンバーが協力して取り組んでおり、その効果も実証されている。患者側は距離や時間の制約の軽減、移動コストの削減などにより、心リハにより参加しやすくなり、医療従事者側にも在宅勤務の実現など働き方改革につながるというメリットがある。

島しょ部への展開や、フィットネスクラブとの連携なども進んでおり、今後も広く展開することを目指している。

<受賞理由>

本取り組みは、医師を始めとした多職種の医療従事者により作り出された、病気の再発防止や患者の健康寿命改善を目的とした医療介入の新しい形である。地域格差や時間的な制約、経済事情、性別などの個々の事情により、心リハを受けたくとも受けられないといった不平等の解消を目指す素晴らしい取り組みである。遠隔でのリハビリテーションの実現は、患者側はさまざまな制約が解消され負担も減ることにより受診しやすくなり、医療従事者にも、長時間労働や女性医療従事者の離職などの課題解決につながるというメリットがある。現在、島しょ部を始めとした地方への展開や、未病の健康管理のためのフィットネスクラブや自治体などとの連携も進められており、展開性の面でも大きな期待が持てる。

「誰ひとり取り残されない」医療の提供手段の1つとして、SDGs目標3のほか、1、4、5、8達成への大きな貢献につながるとともに、他の目標達成を著しく損なうことのない活動として、選考委員会において文部科学大臣賞にふさわしいと判断された。

○科学技術振興機構理事長賞

団体名：一般社団法人ICTリハビリテーション研究会、ファブラボ品川

取り組み名：自助具3DプラットフォームCOCRE HUBによる持続可能社会の共創

<解決したい社会課題>

- 障害者や高齢者など、多様な人々が公平に活躍できるために、カスタマイズされた「自助具」を簡単に手に入れられる仕組みを作りたい
- 環境破壊につながる大量生産・大量消費に代わるモノの入手方法の選択肢を増やしたい

<取り組み概要>

本取り組みでは、高齢者や障害者の自立生活に役立つ個別カスタマイズされた道具である「自助具」作成の共創プラットフォーム“COCRE HUB(コクリハブ)”を、作業療法士などの専門家と当事者との共創で運営している。現在、COCRE HUBのWEBサイト上には自助具を3Dプリンターで作成するための作成モデルが200種以上掲載されており、作成モデルのQRコードをスマートフォンで読み取ることで、誰でも簡単に自分に合った自助具を作ることができる。また、株式会社良品計画などとの連携でリサイクル材料を用いた3Dプリンター工房を運営し、そこで作成した自助具の販売も行っている。作成においては、特殊なソフトを使用することなく寸法を調整できるサービスや、作成後の加温で簡単に加工できる材料の活用など、多岐にわたるサービスも提供している。また、当事者ととともに短期間で集中して自助具を作成し成果をオープンにするイベント「インクルーシブ・メイカソン」を国内外で開催し、仲間づくりを進めている。これらの活動を通して、多様な人々が公平に活躍できる社会や環境破壊につながる大量生産・大量消費に代わるモノの入手方法の選択肢を増やすことを目指している。

<受賞理由>

本取り組みは、高齢者や障害者など、個別の困り事を抱えている人々が必要とする「自助具」の作成を、より簡単に、かつより使いやすい形でオープンに作り出す仕組みを実現している。弱者の視点を持っている作業療法士と、技術を保有するファブラボの連携により、これまでになかった価値を生み出せている点でも、SDGsの理念をよく反映した活動である。特に、困り事を抱えた当事者を“Need Knower”と位置付け共創している点は、パートナーシップの面でも素晴らしい。

多様な人々が平等に活躍する場を提供するために有効な取り組みであり、SDGs目標4のみならず8、9、10、12の達成への貢献が期待でき、かつ他の目標達成を著しく損なうことのない活動として、選考委員会において科学技術振興機構理事長賞にふさわしいと判断された。

○優秀賞

①団体名：buoy合同会社

取り組み名：ボランティアと共に海岸漂着プラスチックごみをアップサイクル

<解決したい社会課題>

- 海洋プラスチック問題の解決のため、海岸に漂着するプラスチックごみを自律的、持続的に回収する仕組みを構築したい
- 海洋プラスチックごみの漂着地が抱える問題を社会で共有し、問題の解決に結び付けたい

<取り組み概要>

海洋プラスチックごみ問題は全世界共通の深刻な社会課題であるが、その多くは中国やアジア地域からの流出と考えられており、日本は世界有数の海洋プラスチックごみの漂着地である。漂着したプラスチックごみは、全国で多数のボランティアなどの手で拾われているが、汚染や分別の面からその再利用は難しく、ほとんどが再生されないという実態がある。本取り組みはプラスチック業界の1企業によるもので、漂着したプラスチックごみを分別不要で再生可能にする製造方法を開発し、全国30以上の団体から漂着ごみを買取り付加価値のある製品に加工・販売している。製品全てに採取地と採取団体の情報を入れたQRコードが付けられ、原料となったごみを回収した団体の情報をたどることができる。すなわち、商品そのものに人とつながる付加価値が付き、それにより、購入者は「商品を買う」という行動でビーチクリーン（海岸清掃）を行う人々を支援できる。加工製品は、美術館やサーフショップで販売されているほか、ホテルのアメニティーとしても利用されている。また、社会で認知してもらえるよう大手企業とのコラボレーションも検討している。

海洋プラスチックごみの問題はさまざまな矛盾も内包しているが、本取り組みでは、将来的にはごみの流出地に加工施設を作り、プラスチックごみが海洋に流出する前に製品化することで、各地でごみが再生・循環する仕組みを作り、海洋プラスチックごみの問題の最終的な解決を目指している。

<受賞理由>

本取り組みは、本来は社会全体の大きな課題である海洋プラスチックごみ問題に、プラスチック関連の事業を営む企業自らが向き合い始められたものである。漂着ごみから製造した製品に新たな価値を付け再度流通させるとともに、社会と課題を共有する工夫も行われている。将来的にはブロックチェーンの技術を駆使してさらにその価値を高めようとしているなど、長期的なビジョンもしっかりと考えられている。

自らが身を置く業界に関わる社会課題に真摯に向き合い、その解決を目指す取り組みであり、SDGs目標14のみならず4、8、11、12の達成への貢献が期待でき、かつ他の目標達成を著しく損なうことのない活動として、選考委員会において優秀賞にふさわしいと判断された。

- ②団体名：群馬大学 次世代モビリティ社会実装研究センター、桐生市、群馬県立桐生高等学校、株式会社桐生再生、株式会社シンクトゥギャザー、日本モビリティ株式会社、ゆっくりズム研究所

取り組み名：低速電動バスの社会実装による地域課題解決の取り組み

<解決したい社会課題>

- 免許返納後の移動手段の不足など、高齢者の移動手段にまつわる社会課題を解決したい
- 公共交通サービスの縮小によるコミュニティの疲弊などの地域の社会課題を解消し、過疎地域に暮らす人々のQOLを向上させたい
- マイカー依存型のライフスタイルに起因するCO₂排出を抑えたい

<取り組み概要>

本取り組みでは、群馬大学が保有する技術を活用した低速電動バスを、一般企業、自治体、地域の高校生など多様なステークホルダーとの協働で開発・運行し、地域住民の移動支援や地域活性化につなげる活動を長年にわたり行っている。特に高齢化が進む地方都市では、公共交通機関の縮小や免許返納などによる高齢者の移動の困難さが共通の課題であるが、桐生市では、その解決手段の1つとして2012年から低速電動バスの導入を開始した。本取り組みで開発された電動バスには、バッテリーや自動運転技術などが活用されており、高齢過疎地域の人々に交通手段を提供するものであるが、近接学^{注)}に基づいた車内空間の設計を行うことで「移動するコミュニケーション空間」という新しい価値も創り出し、高齢者のQOL向上にもつなげている。

現在、このバスは全国20カ所以上の地域に普及しており、さまざまな団体が協働するための社会的装置としての役割も果たしている。今後は、行政などと連携した社会実験を重ねながら、過疎地域でのより持続的な運行モデルの構築を進め、さらに多くの地域への展開を検討している。

注) 近接学：集団におけるコミュニケーションに対し、空間内での個々人の配置がどのような効果をもたらすかを研究する学問。

<受賞理由>

交通手段に脆弱な人々に対し、時速20キロメートル以下で走行しCO₂排出量も少ない乗り物である「スローモビリティ」という手段で公共交通へのアクセスを提供する活動は、現在全国各地で行われている。本取り組みは、大学、自治体、地元住民や高校生、地元メーカーなど、多様なステークホルダーの協働で長い歴史を持って行われている点が特に特徴的である。取り組みの内容は自治体の政策にも反映されており、国のグリーンスローモビリティの推進にも寄与している。また、取り組みをさらに持続可能なものにするための運行モデルの構築や検証、地域との合意形成などにも継続的に取り組まれている点を評価した。

SDGs目標11のみならず3、13の達成への貢献が期待でき、かつ他の目標達成を著しく損なうことのない活動として、選考委員会において優秀賞にふさわしいと判断された。

③団体名：IT FORCE株式会社

取り組み名：介護タクシーを手軽に呼べる配車アプリ「よぶぞー」の開発・運営

<解決したい社会課題>

- ・ 今後需要増が予測される介護タクシーの予約の利便性を向上させ、介護タクシーを必要とする人々が取り残されずに活動できる社会を作りたい

<取り組み概要>

本取り組みでは、介護タクシーに特化した配車予約のためのマッチングアプリ「よぶぞー」を開発し、2013年4月より首都圏や大阪、兵庫周辺で運用している。車いすやストレッチャーなどに乗ったまま乗降できる特徴を持つ介護タクシーは、利用の際には配車予約が必須となる。2025年問題として知られる超高齢化社会の到来により、今後、介護タクシーの需要が大きく増加することが考えられるが、その担い手は大手のタクシー事業者などではなく個人事業主が多く、現状でも台数は不足しており地域格差も激しい。配車予約がスムーズにいかず、介護タクシーを必要とする人が外出や移動を断念したり、予約を取り損ねたドライバーが営業機会を逃したりする実態がある。

このアプリでは、予約時のユーザーインターフェースや、予約情報の配信方法、データの管理方法などを独自のアルゴリズムで工夫し、利用者が数回のタップで予約依頼を行うことを可能にしている。各種データや地図アプリとの連携による利便性の向上、ケアマネージャーとの連携や信頼できるドライバーの指名ができる仕組みなど、介護タクシーならではの細かいニーズに応える機能も搭載している。また、利用者とドライバーのマッチングが不調となった場合の細やかなフォローも行われており、介護タクシーを必要とする人が、あきらめることなく活動できる社会を実現しようとしている。

<受賞理由>

本取り組みは、介護タクシーの配車予約のためのマッチングアプリを提供し、介護タクシーを必要とする人々が移動をあきらめることなく活動できることを支援するものである。現状、介護タクシーは台数も足りておらず予約にも手間がかかる上、地域での利便性の格差も大きい。また、利用者が予約すること自体に困難を抱えている、乗降時にドライバーが利用者の体に触れる必要があるなど、一般のタクシーとは異なる事情が多々存在する。このため、アプリ開発にあたっては、「介護タクシーは、結局は“人”の手が必要なものである」という考えの下、介護タクシーに特化した工夫が利用者のみでなくサービスを提供するドライバーの視点からもしっかり考えられている点を評価した。

SDGs目標3のみならず8、9、11の達成への貢献が期待でき、かつ他の目標達成を著しく損なうことのない活動として、選考委員会において優秀賞にふさわしいと判断された。

「STI for SDGs」アワードの概要について

1. 「STI for SDGs」アワードとは

「STI for SDGs」アワードは、科学技術・イノベーション（STI）の力で社会課題を解決し、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）の達成に一層貢献することを目指す表彰制度です。

STIを用いて社会課題を解決する日本発の優れた取り組みを表彰、発信、共有することで、同様の社会課題を抱える国内外の他地域での活用を促し、他地域における社会課題の解決、SDGsの達成への貢献を目指します。

2. 表彰対象

科学技術・イノベーション（科学技術の知識に基づいて新しい社会的・経済的価値を創造すること）を用いて社会課題の解決やSDGsの達成を目指し、具体的な活動を実施している国内の団体による優れた取り組みを表彰します。

3. 応募要件

科学技術・イノベーションを用いて社会課題の解決やSDGsの達成を目指し、具体的な活動を実施している国内の団体であること。

団体とは、自治体、企業、大学等（国公立大学、高等専門学校、国立試験研究機関、公立試験研究機関、国立研究開発法人など）、公益法人・NPOなどの非営利法人、教育機関（高等学校、中学校など）、自治会やサークル、市民ネットワークなどを指します。

4. 「STI for SDGs」アワード選考委員会 委員一覧

（敬称略、委員は五十音順）

（委員長）

蟹江 憲史 慶應義塾大学 大学院政策・メディア研究科 教授

（委員）

上田 壮一 一般社団法人Think the Earth 理事

小原 愛 一般社団法人Japan Innovation Network
ディレクター

須崎 彩斗 株式会社三菱総合研究所 コーポレート部門 統括室 副統括室長

新田 英理子 一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク（SDGsジャパン）
事務局長

（令和6年10月1日現在）